

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 5 日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06179

研究課題名(和文) 周産期のパートナーからの暴力と虐待的育児・育児困難感との関連及び心理要因の検証

研究課題名(英文) Associations among intimate partner violence, child abuse and parenting difficulties during perinatal period and its psychological factors

研究代表者

キタ 幸子 (Kita, Sachiko)

東京大学・大学院医学系研究科(医学部)・助教

研究者番号：70757046

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：周産期のIPVと産後の虐待的育児・育児困難感との関連及びその心理要因を明らかにすること目的に、平成28年7月～平成29年9月に妊娠後期・産後1か月・産後3か月における縦断観察研究を行った。その結果、周産期のIPVは産後の虐待的育児・育児困難感と関連し、更にその関連への心理要因として産後うつ病及びボンディング障害が明らかになった。本結果から、産後早期の児童虐待防止に向けて、妊娠中のIPV早期発見と軽減に向けた介入の必要性が示唆された。更に、IPV被害妊婦に対しては産後の児童虐待・育児困難感予防に向けて、産後うつ病及びボンディング障害の早期発見及び発症・重症化予防の取り組みの重要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：In order to identify the associations between intimate partner violence (IPV), child abuse, and parenting difficulties and its psychological factors, a longitudinal study from the third trimester of pregnancy to three months postnatal was conducted in two obstetric hospitals in Tokyo from July 2016 to September 2017. The results of this study showed IPV during perinatal period was significantly associated with child abuse and parenting difficulties after childbirth. In addition, those associations were significantly affected by postnatal depression and bonding failure toward infants. This indicates the necessity of the early detection and intervention for IPV since pregnancy and the importance of psychological cares to prevent postnatal depression and bonding failure among abused women in order to finally prevent child abuse and parenting difficulties after childbirth.

研究分野：パートナーからの暴力、周産期メンタルヘルス

キーワード：パートナーからの暴力 児童虐待 育児困難感 産後うつ病 ボンディング障害

1. 研究開始当初の背景

周産期のパートナーからの暴力 (Intimate Partner Violence: IPV) は、深刻な健康問題である。近年、妊娠期の IPV は、本邦では 31.4% と頻度が高く (Inami ら, 2010)、妊娠中に暴力が悪化することが報告されている (McFarlane ら, 1995; Bancroft, 2004)。更に妊娠期の IPV の 44.6-75.0% は産後も継続することが明らかになっており、周産期医療現場での IPV の早期発見・対応が喫緊の課題である (Harrykisson ら, 2002)。

周産期の IPV は、母親の育児行動に大きな影響を与えることが示唆されている。Chan ら (2012) は、妊娠中に IPV 被害を経験した母親は、産後 3 年後に児へのネグレクト、身体的暴力などの虐待的育児の割合が 1.5 倍高く、その関連の要因の一つとして、妊娠前から継続した産後の IPV があることを報告した。このことから、周産期に IPV を経験した母親は、産後早期から虐待的育児や育児困難感等の育児上の問題を抱える可能性が高いことが示唆されるものの、未だ周産期の IPV と産後早期の虐待的育児・育児困難感との関連を検証した研究はなく、明らかになっていない。

周産期のメンタルヘルスも、産後の育児行動に著しい影響を与える。先行研究では、産後うつ病、新生児へのボンディング障害、妊娠への否定的感情などの周産期のメンタルヘルス悪化が、産後早期の母親の虐待的育児や育児困難感の心理的要因となることが報告されている。妊娠期の IPV は妊娠期・産後の抑うつ・不安、新生児へのボンディング障害 (Kita ら, 2016) と関連することが明らかになっており、以上のことから、周産期に IPV を経験した女性は、妊娠期・産後の産後うつ病やボンディング障害などの周産期メンタルヘルスが悪化し、その結果、産後早期の虐待的育児や育児困難感に至ること可能性が考えられる。しかしながら、周産期の IPV と産後早期の虐待的育児・育児困難感との関連への心理的要因を検証した研究は未だなく、その心理メカニズムは明らかになっていない。

本研究で周産期の IPV と産後早期の虐待的育児・育児困難感との関連及びその心理的要因を明らかにすることで、IPV 被害女性の産後早期の育児確立に向けて、周産期医療現場での IPV 被害女性のニーズを反映した効果的なケア方法の示唆が得られると考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は 2 つである。

(1) 周産期 (妊娠期・産後 1 か月・産後 3 か月) の IPV と産後早期 (産後 1 か月・産後 3 か月) の虐待的育児行動・育児困難感との関連を明らかにする。

(2) 周産期 (妊娠期・産後 1 か月・産後 3 か月) の IPV と産後早期 (産後 1 か月・産後 3 か月) の虐待的育児行動・育児困難感との関連に影響する心理的要因を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 研究デザイン: 縦断観察研究

(2) 研究対象: 都内産科施設 2 か所の妊婦健診に受診した妊娠後期の妊婦 822 名

(3) 期間: 平成 28 年 7 月 ~ 平成 29 年 9 月

(4) 調査方法: 産科外来内の個室で妊娠後期にインターネットを用いた自記式質問紙による回答を依頼した。更に対象者が産後 1 か月・3 か月時点で、対象者のメールアドレスを通してインターネットを用いた自記式質問紙の回答を依頼した。

(5) 調査内容:

妊娠後期

(a) 属性: 年齢、出産予定日、婚姻状況、同居家族、国籍、最終学歴、就労状況、世帯収入、初経産婦、既往歴、妊娠中の健康問題の有無、流産・人工妊娠中絶経験の有無、精神疾患既往の有無、パートナーの年齢・国籍・就労状況・最終学歴など

(b) 妊娠中の IPV 被害: Violence Against Women Screen (VAWS) (片岡, 2005)、妊娠前の IPV の有無と程度・回数の変化 産後 1 か月

(a) 出産・現在状況: 出産日、分娩様式、出産への満足度、里帰り出産の有無、児の出生体重、児の性別、児の入院の有無、児の健康状態、授乳方法など

(b) 産後の IPV: Violence Against Women Screen (VAWS) (片岡, 2005)

(c) 虐待的育児: オリジナル 14 項目

・精神的暴力: 「八つ当たりした」「大声でなった」「暴言をはいた」など 5 項目

・ネグレクト: 「世話を長い間しなかった」「赤体の不調があっても医療機関に連れて行かなかった」など 3 項目

・身体的暴力: 「平手で叩いた」「強く揺さぶった」「赤ちゃんをなぐった」など 6 項目

(d) 産後うつ病: 日本語版 Edinburgh Postpartum Depression Scale (EPDS) (岡野ら, 1996)

(e) 新生児へのボンディング障害: 日本語版赤ちゃんへの気持ち質問票 (MIBS-J) (Yoshida ら, 2012)

(f) 育児困難感: 育児不安尺度 (1, 2 か月児用) (吉田, 1991)

産後 3 か月

(a) 現在の状況: 授乳方法、同居家族、母親の健康状態、児の現在の体重、児の入院の有無、児の健康状態、予防接種・産後 3 か月健診の受診状況など

(b) 産後の IPV: Violence Against Women Screen (VAWS) (片岡, 2005)

(c) 虐待的育児: オリジナル 14 項目 (産後 1 か月と同様)

(d) 産後うつ病: 日本語版 Edinburgh Postpartum Depression Scale (EPDS) (岡野ら, 1996)

(e) 新生児へのボンディング障害: 日本語版赤ちゃんへの気持ち質問票 (MIBS-J)

(Yoshida ら, 2012)

(f) 育児困難感: 育児不安尺度 (1, 2 か月児用)(吉田, 1991)

(6) 分析方法

妊娠後期・産後 1 か月・産後 3 か月の IPV 陽性群と陰性群において Welch t 検定、Fisher の正確確率検定を用いて比較した。

次に で IPV と関連を示した変数を用いて、共分散構造分析を用いて解析した。有意水準は p 値 .05 未満とした。

(7) 倫理的配慮

本研究は東京大学医学部倫理審査委員会の承認を得て実施した。また対象者の安全性とプライバシーを確保するために、対象者のリクルート・研究説明の際には、パートナーがいない個室で行った。

4. 研究成果

(1) 対象者の流れ

822 名の女性をリクルートし、妊娠後期に回答した女性は 636 名、産後 1 か月は 533 名、産後 3 か月は 445 名から回答が得られた。解析対象は、妊娠後期から産後 3 か月まで全ての回答のあった 445 名とした。

(2) 記述統計

妊娠後期において IPV が陽性と判断されたものは 73 名 (16.4%)、産後 1 か月では 62 名 (13.9%)、産後 3 か月では 61 (13.7%) であった。また産後 1 か月で児への精神的暴力の項目に 1 つでも「1 回あった」と回答した者は 79 名 (20.0%)、ネグレクトは 14 (3.1%)、身体的暴力は 4 (.9%) であった。3 か月では精神的暴力が 84 名 (18.9%)、ネグレクト 14 名 (3.1%)、身体的暴力 6 名 (1.3%) であった。

更に産後 1 か月の産後うつ病で陽性と判断された者は 76 名 (17.1%)、産後 3 か月では 41 名 (9.2%) であった。新生児へのボンディング障害に関しては、産後 1 か月の「愛情の欠如」の平均値は $1.05 (\pm 1.64)$ 、「怒りと拒絶感」は平均値 $.87 (\pm 1.15)$ 、産後 3 か月の「愛情の欠如」は平均値 $.52 (\pm 1.01)$ 、「怒りと拒絶感」は平均値 $.65 (\pm 1.36)$ であった。

(3) 2 変量解析

妊娠期の IPV と関連を示した変数は、経産婦 ($p = .03$)、パートナーの非正規就労 ($p = .02$)、産後 1 か月の IPV ($p < .000$)、虐待的育児 ($p = .004$)、育児困難感 ($p = .03$)、産後 3 か月の IPV ($p < .000$)、虐待的育児 ($p < .000$)、育児困難感 ($p = .01$) であった。

産後 1 か月の IPV と関連を示した変数は、自然分娩 ($p = .04$)、産後 1 か月の虐待的育児 ($p = .002$)、育児困難感 ($p < .000$)、産後うつ病 ($p = .002$)、産後 3 か月の IPV ($p < .000$)、虐待的育児 ($p < .000$)、育児困難感 ($p = .004$)、産後うつ病 ($p = .02$) であった。

産後 3 か月の IPV と関連を示した変数は、虐待的育児 ($p < .000$)、育児困難感 ($p = .001$)、

産後うつ病 ($p = .002$) であった。

(4) 共分散構造分析

周産期の IPV と産後早期の虐待的育児・育児困難感との関連

最終的なモデルのデータ適合は良好であった。主な結果として (a) 妊娠中の IPV は産後 1 か月の IPV ($\beta = .68$) と関連した (b) 妊娠中の IPV は産後 1 か月の虐待的育児 ($\beta = .15$)、産後 3 か月の虐待的育児 ($\beta = .15$) と関連した (c) 産後 1 か月の IPV は産後 3 か月の IPV ($\beta = .52$)、産後 3 か月の虐待的育児 ($\beta = .19$) と関連した (d) 産後 1 か月の IPV の誤差変数と産後 1 か月の虐待的育児の誤差変数 ($\beta = .16$)、育児困難感の誤差変数間 ($\beta = .26$) は関連した (e) 産後 1 か月の虐待的育児は産後 3 か月の虐待的育児と関連した ($\beta = .40$) (f) 産後 1 か月の育児困難感は産後 3 か月の育児困難感と関連した ($\beta = .64$) (g) 産後 3 か月の IPV の誤差変数と産後 3 か月の育児困難感の誤差変数間は関連した ($\beta = .12$)。

周産期の IPV と産後早期の虐待的育児・育児困難感との関連への心理要因

主な結果としては、(a) 妊娠中の IPV が産後 1 か月の産後うつ病 ($\beta = .12$) と関連した (b) 産後 1 か月の産後うつ病は産後 3 か月の産後うつ病 ($\beta = .45$)、虐待的育児 ($\beta = .09$)、育児困難感に関連した ($\beta = .14$) (c) 産後 1 か月の IPV の誤差変数と産後 1 か月のボンディング障害の誤差変数は関連した ($\beta = .12$) (d) 産後 1 か月のボンディング障害が産後 3 か月のボンディング障害と関連した ($\beta = .51$) (e) 産後 3 か月のボンディング障害の誤差変数と産後 3 か月の虐待的育児の誤差変数 ($\beta = .13$) 間は関連した。

(5) 結論

本結果から、周産期の IPV は産後の虐待的育児・育児困難感と関連することが明らかになった。更に、その関連への心理要因として、産後うつ病及びボンディング障害が明らかになった。

以上のことから、産後早期の児童虐待防止に向けて、妊娠中の IPV 早期発見と軽減に向けた介入の必要性が示唆された。更に、IPV 被害妊婦に対しては、児童虐待・育児困難感予防に向けて、産後うつ病及びボンディング障害の早期発見、発症・重症化予防の取り組みの重要性が示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

Kita S, Umeshita U, Tobe H, Hayashi M, Sato I, Soejima T, Sakka M, Kamibepu K. Associations between intimate partner violence before and during pregnancy, negative attitudes towards pregnancy and mother-to-fetus bonding failure. 21st East Asian Forum of Nursing Scholars

(EAFONS) & 11th International Nursing Conferences (INC), 11-12 January 2018, Seoul, Korea.

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕(計0件)

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

6. 研究組織

(1) 研究代表者

キタ 幸子 (KITA, Sachiko)
東京大学・大学院医学系研究科・助教
研究者番号：70757046

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

上別府 圭子 (KAMIBEPPU, Kiyoko)
東京大学・大学院医学系研究科・教授
研究者番号：70337856